

東邦大学学術リポジトリ



OPAC

東邦大学メディアセンター

タイトル	Transcatheter Cardiovascular Therapeutics(TCT)2015
別タイトル	Transcatheter Cardiovascular Therapeutics (TCT) 2015
作成者(著者)	宇都宮, 誠
公開者	東邦大学医学会
発行日	2016.03
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 63(1). p.86 87.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	学会参加記
著者版フラグ	publisher
JaLDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2016.r021
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD64658466

Transcatheter Cardiovascular Therapeutics (TCT) 2015

宇都宮 誠

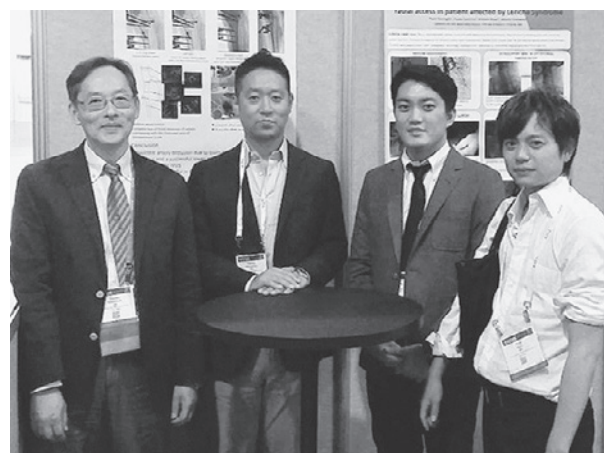
東京労災病院循環器科

東邦大学医学部内科学講座循環器内科学分野 (大橋)



2015年10月11日から5日間にわたり、米国サンフランシスコにて開催されたTranscatheter Cardiovascular Therapeutics (TCT) 2015に参加させて頂きました。TCTは27年前から始まった北米最大の循環器領域のカテーテル治療ライブコースであり、参加者は世界中から集まり1万人を超える非常に大きな規模となります。今回は空軍の航空ショーと日程が重なり周辺のホテル代が高騰したため、ホテル探しに非常に苦労しました。

TCTでは世界中の一流施設から中継をつなぎカテーテル治療のライブ映像を放映するプログラムを中心に、カテーテル治療に関する教育セッションや口演・ポスターでの演題発表も行われます。日本で開催されるライブコースに比べると大きさだけでなく内容も“派手”で、ゲストスピーカーとして昨年のヒラリー・クリントン氏に続き、今年アーノルド・シュワルツェネッガー元カリフォルニア州知事の講演が行われ非常に盛り上がりました。アーノルド・シュワルツェネッガー元カリフォルニア州知事は心臓疾患からカテーテル治療を受けた経験があり、その縁もあって講演を引き受けたそうです。ライブ中継はメイン会場を含めた3会場で同時に開催され、メイン会場では全ての会場のライブ中継を見ることができます。しかしメイン会場は常にほぼ満席の状態でした。今年は特に新しく使用可能となった大動脈弁に対するカテーテル治療の中継が多くなされており、3会場のうち2会場が大動脈弁に対するカテーテル治療という時間帯もありました。スポンサーシップも関連していたのだと思いますが、会場内は大動脈弁の新しい治療デバイスの広告が所狭しと張られていました。米国以外からの参加者を増やす工夫として「TCT Radio」という企画があり、会場内でスペイン語・中国語・日本語の実況中継が聞けるようになっていました。日本語



ポスターを前にして。左から中村正人教授、筆者、東京労災病院 山下医師、東邦大学医療センター大橋病院 田尻医師。

の「TCT Radio」では当講座の中村正人教授を含めた数人の有名な先生方が代わる代わる会場内で行われているさまざまな企画を日本語で解説してくださっていました。サンフランシスコは周囲に観光スポットも多いため、参加者を会場内に留めておくための素晴らしい企画と感じました。

私はポスター発表で2つの演題を発表させて頂きました。“Obtainment of wound blush is the most important angiographic endpoint for wound healing”と“Clinical impact of repeat infrapopliteal interventions for critical limb ischemia”の2つで、いずれも重症下肢虚血に対するカテーテル治療に関する臨床研究の結果をまとめたものでした。各国の参加者をつたない英語でdiscussionできたことは自分にとっても大きな収穫となりました。また医局の後輩である山下雄司医師や田尻勇太医師の症例報告もあり

非常に頼もしく感じ、自分にとっても刺激となりました。夜には学会に参加していた同年代の日本の研究者や留学中の先生方と交流する機会に恵まれ、カリフォルニアワインを楽しみながら学会会場では聞けない世界の最先端医療の話や留学の苦労話などを聞くことができ、今後の臨床・研

究を進めていく上で最大の収穫となりました。

研究を指導していただいた杉 薫教授、中村正人教授、長期間病院を空けてしまい迷惑をかけた東京労災病院の吉玉 隆部長・浅原敏之部長・スタッフの皆様にご挨拶申し上げます。

DOI : 10.14994/tohoigaku.2016.r021